古市公威の偉さ 8

金関義則

「みすず」一九八三年一二月（「古市公威の偉さ」6）に、長谷川芳之助の論考〝満洲問題の経済的方面〟を紹介し、つゞいて次のように述べていた。

この論文（明治三六年八月一八日の「日本」、「東京朝日新聞」に掲載された）は多くの読者から、法科大学の教授たちを圧倒する愛国の文章として受けとめられた。

長谷川芳之助、斎藤修一郎は日露戦争の終ったとき、小村寿太郎が国民の要望を果たせなかったと非難し、外務大臣を辞職せよと強要した。斎藤が杉浦重剛を訪ね、いっしょに押しかけて辞職させようと誘ったが、杉浦は小村を越える能力を誰がもっているか、いずれ小村には総理大臣をやってもらいたいと言って拒否した。さらに小村こそは一身を顧みず国家の将来しか眼中にない国士であると力説したので、斎藤は気勢をそがれて退散した。長谷川は杉浦の制止をきかず、その後も攻撃しつづけた。かつて対露同志会を結成して駆いだように、対韓同志会を結成して日韓併合の強行を迫った。小村が再び、明治四一年八月二七日から四四年八月三〇日にかけて外務大臣となったが、小村の対米政策は軟弱で許せないと叫ぶのであった。小村が体力つきて辞任し、絶命したのは四四年一一月二六日のことであった。小村が去ってから、長谷川の気力もだんだんに衰えていった。製鉄事業については、古市公威は辛抱づよく長谷川をかばって発言の機会を与えた。すぐにどなりたがる長谷川の独行、奇行に多くの友人は辟易したが、古市は柔軟な態度を失うことなく包みこんで、長谷川ならではの役割を見つけてやろうとした。長谷川は唐津藩の貢進生ではなく、少しおくれて大学南校にやってきたが、たちまち英語生徒のなかで頭角をあらわし、仏語生徒を代表する古市に議論を吹っかけてきた。想えば長い交友であった。

長谷川の病死で、豪傑は全て消え去った。豪傑の時代は終ったと、古市は考えこむのであった（明治八年の文部省第一回留学生のうち、まだ南部球吾は鉱山事業で、原口要、平井晴二郎は鉄道事業で、重責を元気に背負いつづけたが、豪傑ぶったりはしなかった）。大学南校、開成学校にあって、斎藤修一郎、小村寿太郎、長谷川芳之助、安東清人とともに五人組の異名で畏敬された古市自身は、いつのころからか、豪傑ではなくなっていた。明治三一年七月に主務（内務省の土木技監兼土木局長）をも、兼務（東京帝国大学工科大学の教授兼学長）をも退任したときも、三九年六月に韓国統監府鉄道管理局長官に就任したが、まもなく初代の満鉄総裁になれとのすすめを断ったときも、また鉄道管理局長官を辞任して帰国したときも、古市は豪傑らしくないと、豪傑たちは首をかしげたのであった。退くことなく進むことのみを考えがちな豪傑たちには、すでに早くから古市の出処進退はしばしば判りにくいものになっていた。そのときどきに、古市がどのように考えていたかを探ってゆきたい。

以上の拙稿の補足をいくらか果たそうと、筐底にねむっていた粗稿を要約して示してみたい。まず東京大学の前身である大学南校、開成学校時代の豪傑学生の生活をスケッチした資料として、明治四三年五月に日報社が発行した橋南漁郎『大学学生溯源』（以下では『溯源』と略記）を見落すことができない。これは東京日日新聞の社長であった千頭清臣にすすめられて橋南が豪傑たちを直接取材して「東京日日新聞」に連載したもので、当時まだ健在だった豪傑たちの証言がちりばめられている。そのなかで最も注目をひくのは、文部省第一回留学生が、日露戦争の講和会議に全権大使として出かける小村寿太郎を励ます会合をもち、さらに会議を終えた小村を迎えて再び集合している場面である。五人組の音頭取である古市公威が呼びかけて、まず久々に全員がそろったので記念写真を撮った（第2図）。明治八年七月に第一回留学生がアメリカ航路の客船で旅だったときの記念撮影（第1図）と同じように並ぶことを提案し、あえて小村を囲むように並ばせなかった。最年長の温厚な原口要を前列中央にすえ、激しやすいものをうまく抑えた古市の配慮が見事である。『溯源』にあるように〝吾等同期留学生の中から、兎も角も国家の重大事を双肩に担ふて立つ所の人物を出したることは、吾等同期留学生にとりても亦名誉の事であるから、一つ大に其行を壮にしてやらふではないか〟と集めたわけであるが、何が名誉かとかみつく長谷川芳之助を誘いだすのは古市の至芸であり、古市が取りしきる壮行会だから独立独歩を信条として群れたがらない鳩山和夫や松井直吉なども安心して参加できたのである。三〇年前の昔に返って、それぞれに言いたいことを言わせたことは、黙々とききながら手の内を語らぬ沈痛な小村にとって、何よりの励ましとなったことであろう。古市は〝小村がうまく媾和談判を締結して帰って来たら御祝に僕等が饗応らふ。其代り失敗して帰って来たら、罰として小村が僕等を饗応る。諸君斯いふ事にしては如何か〟と相談したところ、異議なく全員が賛成した。

ところが講和会議から帰国した小村の身辺は甚だあわただしく、いつ御祝してやろうかと古市が思案していたら、小村から壮行会を開いてくれた全員に九鬼隆一、栗塚省吾を加えて、前回と同じ料亭に招待すると言ってきた（北京出張をひかえた多忙のなかの、大

変なやりくりであった。九鬼は大学南校の監事ですでに功なり名をとげ、二八年から枢密顧問官になっていた。栗塚は大学南校時代の仏語生徒で、明治五年に司法省法学校に転校したが、斎藤修一郎にとっては同じ武生藩出身の大事な先輩であった。小村としては多年の友情に感謝して招待したわけで、往年のように談論風発したまではよかったが、小村が大役を果たしたことを、君でなければやれなかったと栗塚がほめたので、たちまち長谷川が怒りだした。栗塚らしい理路整然たる論旨であると一同が耳を傾けたから、なおなお腹が立って〝お世辞を言うな〟と叫ぶなり、大声を張りあげて得意の軟弱外交批判をぶちだした。栗塚も負けずに腹を立て、長谷川の暴論を、容赦なくこきおろした。長谷川は俺達が立ちあがって騒いだおかげで日露開戦に踏みきれたのだぞ、政府の役人どもが手柄顔をするのは許せんと息巻いたから手がつけられない。俺のやることは栗塚なぞにできるか、長谷川のやるくらいのこと何でもできるぞ、それではこんなことが栗塚にできるか、長谷川はどなるなり、栗塚の隣りに坐わっていた九鬼の頭を、腰の扇子を抜いて強くなぐりつけた。たちまちに座敷は騒然となった。静かに坐っていた小村も〝長谷川、貴様は俺の御客様をどうするのだ〟とにらみつける。斎藤は〝長谷川、あやまれ、あやまらぬと俺が承知せぬぞ〟ととびかかる。収拾つかなくなると、まあまあとまるめるのが古市の特技であった。もともと豪傑生徒を取締まる監事の九鬼を、長谷川は毛嫌いしていた。栗塚も五人組にまけない論客で、明治二五年に大審院判事をやめたあと、弁護士、衆議院議員をやっており、長谷川のように帝国党から立候補して当選一回で議場から消えた激語の壮士など眼中になかった。前回と同じ顔ぶれであったら、こんな修羅場にならなかった。第一回留学生という仲間にとっては、九鬼も栗塚も異分子であったかと、洞察力にたけた小村寿太郎もあきれかえった。第一回留学生は、互いに立身出世を競いもしたが、互いに助けあい励ましあってもきたのであった。第二回留学生についても、同じことが言えるが、古市のような人物がいなかったせいか、まとまることが難かしかった。一〇名の留学生のうち、二名の仏語生徒がフランスのエコール・サントラルに行って仲よく学んだほかは、八名の英語生徒はこぞってイギリスに出かけたものの、それぞれに法学、化学、工学を専攻するうちに分散してしまった。なかでも化学を志した二名は、すなわち杉浦重剛と桜井錠二は帰国してから、全く別の世界に生きるようになってしまった。

河上謹一、千頭清臣は往事を回顧しつつ、熱のこもった序文を書いて『溯源』の巻頭を飾った。河上も千頭も学生時代から杉浦と極めて親しかっただけでなく、橋南漁郎の執筆をたえず応援し助言しているから、杉浦を中心に集まった豪傑に『溯源』の記事が片よったのは止むを得ない。記述を細かく検討すると同時に、書きもらされたことを幾つも掘りおこして、全容をとらえる努力を積んでゆかねばならない。

古市公威たち五人組が、秀才を選抜して海外留学させよと叫び、激しい学生運動をまきおこして初志を貫徹した喜びが、明治八年七月の写真にみなぎっている。試験の結果、英語法学科から鳩山和夫、小村寿太郎、菊池武夫が選ばれ、必ず選に入ると豪語して威張っていた斎藤修一郎がもれたとき、さすがの豪傑も落胆するかと友人たちは気の毒がった。機略縦横の斎藤は憤然と選抜した人々を非難し、鳩山の成績は抜群でも剛健硬直の士風に欠けており、海外に送る人物として失格だと貶めつけた。激しく押しまくられて、鳩山をはずして斎藤をくりあげるかわりに、厳しい枠をゆるめて斎藤をも採択することになった。明治八年七月の写真で鳩山の横にもゆけず、前列の菊池にも並びかねている斎藤の姿には、いつもの気概がうかがえない（菊池、斎藤はいっしょにボストン大学に入ることになっていた）。コロンビア大学へ出かける化学の松井、長谷川、南部、法学の鳩山が古市の周囲に集まっている。首席生徒の鳩山、松井、原口、古市（仏語）、安東（独語）が成績順にすわれば、鳩山は前列中央がふさわしいが、年長で温厚な原口を中心にまとめたのは、周到な心くばりからの結果である。これら一一人のうち鳩山和夫（真島藩）、小村寿太郎（飫肥藩）、斎藤修一郎（武生藩）、松井直吉（大垣藩）、原口要（島原藩）、古市公威（姫路藩）、安東清人（熊本藩）の七名が明治三年一〇月に貢進生として入学しており、菊池武夫（南部藩）、長谷川芳之助（唐津藩）、南部球吾（福井藩）、平井晴二郎（金沢藩）の四名はその後に入学して幾人もの先輩を追いぬいた秀才であった。

第一回留学生の選にもれた秀才は杉浦重剛、穂積陳重を先頭にして第二回の選抜を激しく要求し、翌年六月に一〇名が留学することになった。穂積陳重（宇和島藩）、岡村輝彦（鶴舞藩）、関谷清景（大垣藩）、杉浦重剛（膳所藩）、谷口直貞（郡山藩）、沖野忠雄（豊岡藩）の六名が貢進生で、向坂兌（佐野藩）、桜井錠二（金沢藩）、増田礼作（府内藩）、山口半六（松江藩）の四名は貢進生ではない（明治一〇年は西南戦争がおこり、財政状態も悪く、第三回留学生は実現しなかった）。これら東京開成学校を中途退学して海外に出発した二一名につづく秀才は、東京開成学校を改変した東京大学から卒業することになった。鳩山、小村、菊池、斎藤、穂積、向坂、岡村とせりあった英語法科の学生のうち、貢進生だった河上謹一（長州藩）、野村診吉（前橋藩）は東京大学を一一年に卒業するが、中山寛六郎（長州藩）は選にもれるや九年四月に退学し、高橋健三（曾我野藩）も一一年に退学し、それぞれ官途についている。東京大学法学部の卒業生名簿にも、一二年以後は貢進生の名前が見えなくなる。貢進生として最後の卒業生となった河上、野村の二名は八年もかかったことになる。明治一四年に法学部を卒業する加藤高明（尾張藩）も、文学部（政治学、理財学）を卒業する都築馨六（西条藩）も八年の入学生だった。すなわち予備門三年、本科三年（後の高校三年、大学三年）の六年で卒業できる体制が、漸く整ったということができ

第1表　文部省の第一回，第二回留学生

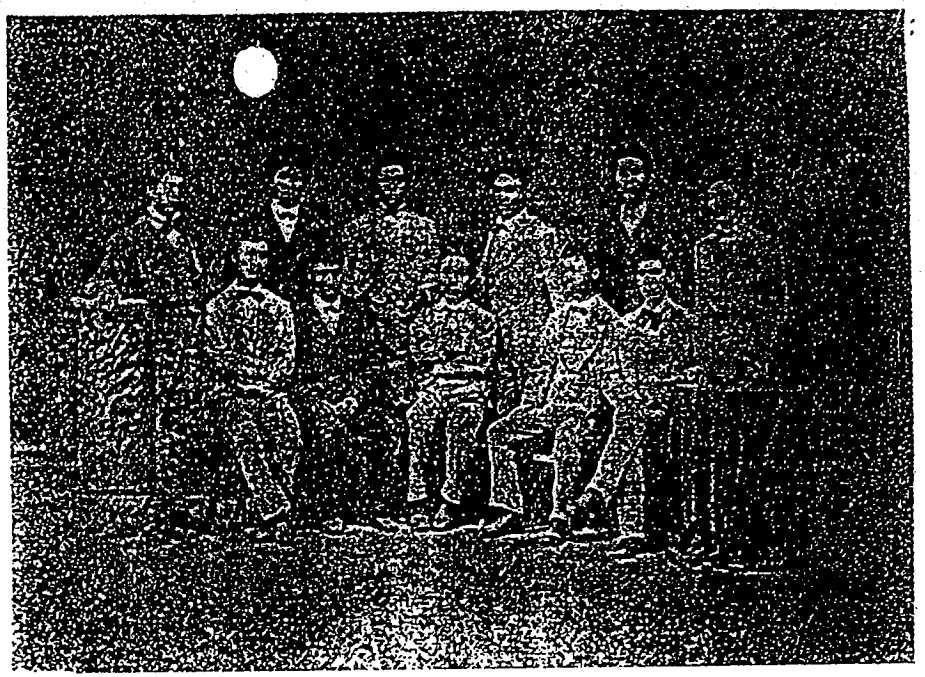
鳩山 和夫	○真島	英語法学	8～13	米	コロンビア大学	文部省・東京大学(法)	法
小村 寿太郎	○飫肥	〃	〃	〃	ハーバード大学	司法省・刑事局	一
菊池 武夫	南部	〃	〃	〃	ボストン大学	司法省・民事局	法
斎藤 修一郎	○武生	〃	〃	〃	〃	外務省・交信局	一
岡村 輝彦	○鶴舞	〃	9～14	英	ロンドン大学	司法省・大審院	法
向坂 兌	○佐野	〃	〃 **	〃	〃	——	一
穂積 陳重	○平和島	〃	〃	〃	〃	文部省・東京大学(法)	法
松井 直吉	○大垣	英語化学	8～13	米	コロンビア大学	文部省・東京大学(理)	理
長谷川芳之助	唐津	〃	〃	〃	〃	三菱（鉱山）	工
南部 球吾	福井	〃	〃	〃	〃	三菱（鉱山）	工
杉浦 重剛	○脳所	〃	9～14*	英	王立農学校	文部省・東大予備門	一
桜井 錠二	金沢	〃	〃	〃	ロンドン大学	文部省・東京大学(理)	理
原口 要	○島原	英語工学	8～13	米	レンセレール校	東京府（土木）	工
平井 晴二郎	金沢	〃	〃	〃	〃	北海道開拓使(鉄道)	工
関谷 清景	○大垣	〃	9～14	英	ロンドン大学	文部省・東京大学(理)	理
増田 礼作	府内	〃	〃	〃	グラスゴー大学	日本鉄道KK	工
谷口 直貞	○郡山	〃	〃	〃	〃	文部省・職工学校	工
古市 公威	○姫路	仏語諸芸学	8～13	仏	E・サントラル	内務省・土木局	工
沖野 忠雄	○豊岡	仏語物理学	9～14	仏	〃	文部省・職工学校	工
山口 半六	松江	〃	〃	〃	〃	三菱（建築）	工
安東 清人	○熊本	独語鉱山学	8～13*	独	フライブルグ校	文部省（専門学務局）	一

○貢進生　*病気退学　**病死

全員が士族で出身藩を代表する秀才ぞろいである。留学先で病気退学したもの，病死したものもあるが，多くは優秀な成績で卒業し，帰国してから留学の成果を大いに発揮した。出身藩，東京開成学校で学んだ学科，留学期間，留学先の学校，帰国してついた職席，やがて与えられた博士号を表示した。

第1図，第2図（前頁）

明治8年の服装は，それぞれ苦心して間にあわせたもので，平素は蓬髪垢衣を誇っていた。それは旧制高校の弊衣破帽の源流であった。留学して体調を崩した安東清人が32歳で倒れたため，38年の写真では前列5名，後列5名の形になった。小村寿太郎の身長は4尺7寸，激務でやつれている。講和会議直後に肋膜炎が再発して，更にやつれて10月16日に帰国した。つづいて11月6日には日清協約を結ぼうとして出立する。その間に第一回留学生は，小村の招待で同じ料亭に参集した。



第1図　明治8年7月　そろって留学に旅立つ直前の記念に．（カッコ内は年齢）
斎藤(20)，鳩山(19)，南部(21)，古市(21)，長谷川(20)，平井(19)
菊池(21)，安東(21)，原口(24)，松井(18)，小村(20)

第2図　明治38年7月　そろって小村寿太郎の門出を励ます．
鳩山(49)，南部(51)，古市(51)，長谷川(50)，平井(49)
斎藤(50)，菊池(51)，原口(54)，松井(48)，小村(50)

よう。加藤は首席で卒業したが官途につく手蔓がなく、三菱に入り、外務省に移るのは六年後の二〇年になってからである。なお河上謹一は農商務省に入って一二年から一五年にかけイギリス留学をし、野村診吉は大蔵省関税局に入り、いずれも官途についたのであった。病気になって退学したものや、度々の試験に落ちて退学したものが続出し、東京大学の前身校に入学しても卒業できたのは一〇人に一人と言われている。

古市公威は幼少のころから、姫路藩主に仕える祖父、父の後を継ごうとして、怠ることなく文武両道の修業に励んできた。ところが明治元年に一四歳になると、幕末の動乱にもまれて洋学の必要を痛感した祖父、父から英語を学べと命ぜられ、辻新次から教わることになった。辻は英語よりも仏語が練達であった。翌年に開成所へ入り、語学は仏語を選んだ。翌々年の明治三年に石本新六とともに姫路藩の貢進生に推され、大学南校で学べるようになった。それよりのち石本とせりあって、仏語生徒の首席をしめつづけた。石本は学校の将来に期待がもてなくなり、仏語を活かすことのできる陸軍を志願するようになり、退学して幼年学校に転じた。古市の性格、才能にほれこんだ仏人教師のマイヨが、いずれはフランスに留学して帰国し、エコール・ポリテクニクやエコール・サントラルのような本格的な大学をつくれと、たえず語りかけた。まもなくマイヨは亡くなったが、古市は堅く決心してフランス留学の機会をつかむことができた。

しかしながら五年のフランス留学から帰ってきたとき、母校は英語で学ぶ東京大学（法学部、文学部、理学部）となっており、理学部には化学科、数学・物理学・星学科、土木工学科、地質学科、採鉱冶金学科があって、本格的な大学を築きあげられる状態になかった。明治一三年二月に伊藤博文（長州藩）の後を継いで内務卿となった松方正義（薩摩藩）が、古市を土木局に高給で迎えてくれたのは有難かった。松方は内務卿の大久保利通（薩摩藩）に命ぜられて明治一一年（一八七八年）のパリ万国博の副総裁（総裁は大久保）として、事務官長の平山成信（幕臣）とともに早くから渡仏して部下を督励することになった。そのころ古市はエコール・サントラルの学生であったが、エコール・サントラルやエコール・ポリテクニクの卒業生が万国博の準備に意欲をもやしているのを凝視していた。公使の鮫島尚信も、松方や平山も、万国博について、科学、技術に明るい古市に教わらねばならない機会が多かった。パリ万国博は国威発揚の祭典として、空前絶後の成功をおさめた。普仏戦争に敗れて意気消沈していた人々を元気づけたのを見るにつけ、松方も古市も富国強兵、殖産興業の志をいよいよ堅くしていたのであった。大久保が暗殺されたにもかかわらず、万国博の後も大久保の遺志をかみしめながら、松方はフランスにとどまって財政学の勉強をした。これを眺めていた古市は、エコール・サントラルを卒業してから、パリ大学理学部に入って数学、天文学を学んだだけでなく、政治学、経済学の講義も聴いている（見事な仏文ノートが東京大学に保存されている）。古市の帰国を待ちかねていた松方は、やがて高額な報酬をとる外人技師にとって代わることを望んでいた。

一四年一〇月から内務卿となった山田顕義（長州藩）も古市に大きい期待をかけ、すっかり任せて余計な口をはさまなかった。山田は、一六年一二月から司法省に移り（大津事件で二四年六月に辞任するまで司法卿、司法大臣を勤める）、すでに陸軍を掌握した山県有朋（長州藩）が軍服のまま内務卿の椅子にすわった。それからまもなく一七年三月から、古市は中央を離れ、信濃川改修工事に取りくむことになった。暫くは汗まみれ、泥まみれの生活が続き、マイヨから与えられた宿願の大学構想は暫くあきらめて、やがて実現せねばならぬ土木局の近代化を思案するようになった。

一八年一二月に太政官制度が廃止され、内閣制度が発足することになった。山県はそのまま内務卿から内務大臣となり、土木局長は三島通庸から西村捨三に代わった。土木技師のなかで評判の高い古市に、西村は注目するようになる。新しく成立した伊藤博文の内閣には、保守的な文部卿の大木喬任（佐賀藩）に代わって、革新的な森有礼が文部大臣として登場した。伊藤の期待に応えて、森は学制改革を大胆に推進した。そうして一九年三月に東京大学（法学部、医学部、文学部、理学部）が、帝国大学（法科大学、医科大学、工科大学、文科大学、理科大学）に改変されることになった。すでに東京大学では理学部から土木工学科、機械工学科、採鉱冶金学科、造船学科を分離し、工芸学部を発足させていた。この工芸学部に、工部大学校（一八年に工部省から文部省に移管ずみ）を併合して工科大学を創設することとなった。かねて理学部長を務めていた菊池大麓によって理学部は円滑に理科大学に改編されたが、工科大学の創設は菊池の手におえず難航した。内務省から古市を引抜いて、工科大学長に任ずるよりほかはなかった。このとき山県有朋は古市を手離すことができず、土木局の兼務を命ずることになった。さすがの森も山県の意向にはさからえなかった。古市の去った信濃川改修の現場は、一六年から土木局に入ってきた沖野忠雄が継ぐことになった。併合に反対する工部大学校の教官、学生をなだめるのに古市以上の適材はいなかった。かねて古市が立案していた土木監督所制度を、山県が採択に踏みきった。古市は工科大学でも土木局でも、次々に難問を誠実に解決していった。東京大学、帝国大学から土木局に入ってきた若い技師は、古市、沖野を中心として土木局の近代化に邁進していった。工科大学を主務とし、土木局を兼務として、このまま進むことができれば、古市の生涯は波瀾なく大学人として長く無事に過ごせたであろう。

明治二一年一二月から二二年一〇月にかけ、山県有朋はヨーロッパ視察に出かけることになった。国会開設に備えて地方自治制度を先取すること、日清戦争に備えて軍備を充実すること、これら懸案をかかえて、随員が選ばれた。内務省から古市公威（技師）、荒川邦蔵（書記官）、中山寛六郎（秘書官）、寺崎遜（属）、陸軍省から

平佐是純（騎兵中佐）、中村雄次郎（砲兵少佐）、小坂千尋（歩兵少佐）、賀古鶴所（軍医）が選ばれた。なおフランス留学中の都築馨六（井上馨の女婿）を外務省参事官に取りたてて、途中から随員に加えた。都築は東京大学を卒業して一五年から一九年にかけ、政治学研究の目的でドイツ留学をしており、語学の達人であった。土木技師の古市が首席随員になるとは、誰にとっても全く意外なことであった。しかしながら古市はフランスで、古市ならではの役割を果たして、めいりがちな山県を元気づけた。すでに陸軍は幕末以来のフランス流からドイツ流に変わっており、海軍はフランス流からイギリス流に変わっており、フランス陸軍、海軍の重鎮に挨拶することは、儀礼にやかましい山県にとって、考えるだけでも胃が痛んだ。古市はパリに着くなり、旧友の手蔓で情報を集め、山県が案ずるほど、先方が気にしていないことを察知して、山県を上手に引きまわしたのであった。山県がオペラに招待されても、威厳を損ずることを恐れて尻ごみすると、背丈のあわない山県の礼装を借りて、古市が見事に代行してのけた。どんな不馴れな場面でも威風堂々と、山県の一行を立派にもりたてたのであった。小坂は明治二年に横浜兵学校語学所（後に陸軍兵学寮に併合）に入り、三年から一〇年にかけてフランス留学して士官学校、参謀学校を優秀な成績で卒業しており（一七年から一八年にかけて桂太郎、川上操六などとともに大山巌の視察旅行に随行している）、古市とは旧知のように話しあうことができた。中村雄次郎も早くからフランス留学して砲兵将校になっており、工科大学の造兵学科の整備にあたって、古市としばしば協議した間柄であった。古市の協力によって、中村は、大きい収穫をあげ、山県を満足させた。藩主の嗣子の赤松定謨とともに私費留学していた騎兵大尉の秋山好古（松山藩）が、騎兵学校で受けている教育について山県に報告した。秋山は歯に衣きせず、騎兵はフランス流を採るべきで、ドイツ流では戦えないと主張した。閑院宮載仁親王（騎兵中尉）が明治一五年からフランス留学をしており、中学校、士官学校、騎兵学校をへて陸軍大学へ進んでいたから（卒業するのは二四年）、秋山の直言に山県も苛立たなかった（なお閑院宮の留学を支えるため、寺内正毅少佐が一五年から一八年にかけてフランスに駐在していた）。古市の案内でパリ万国博を見学したことも、山県に深い感銘をあたえずにはおかなかった。エコール・サントラル出身のエッフェルが、万国博を記念して建てたエッフェル塔に、感嘆の声を惜しまなかった。もし古市がいなかったら、フランスでこれほど愉快に過ごせなかったであろう。山県は予想以上に健康状態が好く、ドイツでは軍医の賀古に側に居らずともよいと暇を出し、耳鼻咽喉科の勉強に専心させた。古市にも行きたい所へ行けと放免した。ともあれドイツでは駐在する部下が賑かに待っており、山県は水を得た魚のように自信を回復したのであった。ベルリン工科大学で原田貞介（長州藩）が土木工学の勉強をしていたので、古市は原田をともなって工科系、理科系の教育、研究機関を効果的に調査することができた（原田は帰国して土木局に入り、沖野忠雄の後継者となった）。荒川邦蔵（長州藩）は明治三年にドイツに出かけ医学を研究することになっていたが、法学に転向して研修を積んで帰国していた。貫進生だった中山寛六郎とともに、山県からあたえられた課題に取りくんだ。山県有朋の一行はフランス、ドイツだけでなくイタリア、イギリス、ロシアをめぐり、アメリカ、カナダを訪ねて帰国した。古市は明治八年にアメリカを経てフランスに留学した往時を偲び、アメリカの遅しい成長に眼をみはり、ヨーロッパだけでなく視野を拡げねばならないことを痛感した。

山県は帰国してから、随員をそれぞれ昇進させた。児玉源太郎（陸軍少将）を助けて、陸軍大学校の整備で成果をあげていた小坂千尋は二二年一一月に中佐になり、児玉、寺内に続く重責をあたえようとしていた（小坂は児玉、寺内、中村より二歳年長でありながら、昇進が非常に後れていた）。帰国してから小坂は軍務局長の桂太郎（陸軍中将）を助けて激務に没頭しているさなか、不運にもコレラにかかって急死した（山県は後に日清戦争、日露戦争で苦しむ度に、小坂のいないことを心から嘆いた）。中村雄次郎は二二年一〇月に中佐、二六年一一月に大佐、三〇年九月に少将に進級し、三一年一月に桂太郎が陸軍大臣になると、陸軍次官に抜擢された（桂、児玉の後を継いで、三五年三月に寺内正毅が陸軍大臣になるや、中村に代わって陸軍次官となったのは古市の旧友の石本新六であった）。

荒川邦蔵は二四年八月に、長与専斎に代わって衛生局長に任命された。荒川の後を継いで二五年一一月に衛生局長になるのは、二三年から二五年にかけてドイツに私費留学した後藤新平（水沢藩）であった。山県有朋が二二年一二月二四日に総理大臣になると、同月三一日に中山寛六郎を首相秘書官にしただけでなく、三月八日に都築馨六も首相秘書官にした。しかも都築は中山を追いこし、荒川が衛生局長から福井県知事となり、内務省を去る頃には、山県の側近中の側近になっていた（若い都築がぐんぐん出世し、四一年八月に男爵を授けられて嫉視をかったが、古市は都築のようには働けぬとして、少しも動じなかった）。

山県有朋に随行してヨーロッパ視察を終えた古市公威は、休職あつかいの工科大学教授、学長に復帰したが、二三年六月一四日に土木局長に任命されて内務省が主務となり、工科大学が兼務ということになった。古市に代わって工科大学長になる人物がおれば、工科大学を去って土木局長に専念することができたであろう。もともと土木局長には技術系官僚がなれないことになっており、強引な処遇と思われた。さらに同年九月一七日には古市は工科大学長として、外山正一（文科大学長）、菊池大麓（理科大学長）、穂積陳重（二六年九月から法科大学長）とともに貴族院の勅選議員に選ばれた。古市の年給は土木局長として三〇〇〇円、兼任の大学教授として五〇〇円、合わせて三五〇〇円、これは外山（二八〇〇円）、菊池（二八〇〇円）、穂積（二五〇〇円）、農科大学長の松

井直吉（二二〇〇円）、農商務省商工局長の斎藤修一郎（三〇〇〇円）、外務省翻訳局長の小村寿太郎（二五〇〇円）をしのいでいた。しかしながら古市は内務省でも帝国大学でもそれ以上の出世を望まず、やがて総長になる菊池大麓、山川健次郎や次官になる斎藤、大臣になる小村に追いぬかれることとなる。ともあれ古市は山県の期待にこたえて、明治二四年には土木局の近代化を達成する。これは法科系の局長に不可能なことであった。そのころは山県有朋、川上操六、児玉源太郎から求められて、京城、釜山を結ぶ京釜鉄道の実現について、あれこれと思案するようになっていた。日清戦争が始まり、原口要、仙石貫（高知藩、東京大学理学部土木工学科を明治一一年に卒業）などが陸軍に動員され、仙石は京釜鉄道に関する現地調査までするが、一向に具体化しない。いずれ実現する条件が整えば、有能な技師を選んで現地に送らねばならないと考えて、古市は調査、研究を進めていた。

明治三一年六月二四日に伊藤博文が内閣を投げだしたため、自由党、改進党が合同して結成された憲政党をふまえて、大隈重信、板垣退助が内閣を組織することができた。このとき内務大臣となった板垣の慰留を断わって、七月一九日に古市は辞任した。これは政党内閣の成立を極力阻止してきた山県に、古市がいさぎよく殉じたものと考えられた。すでに土木局は沖野忠雄を中心として一体となり、誰が首相、内相になろうとも一糸乱れず動けるようになったと、古市は確信して去ったのである。このとき同時に工科大学教授、工科大学長を辞任した。これもまた工科大学が整備されたから、いずれ後進に途を譲ろうと考えていたからである。そのことは限板内閣ともいわれた政党内閣がまもなく瓦解したときに、誰にも判りやすくなる。すなわち瓦解の後をうけて、三一年一一月に山県有朋の第二次内閣ができたとき、古市は鉄道事業を管掌する逓信省の次官となり、古巣の土木局に帰ろうとしなかった。逓信大臣の芳川顕正はかねて古市の識見、能力に敬服しており、制肘しようとはしなかった。伊藤博文が政友会を結成して三三年一〇月に第四次内閣をつくるまで、古市は逓信省に腰をすえて勉強することができた。二七年一月に星亨とともに弾劾されて農商務次官を辞任して官途を去り、つぎつぎに手がけた仕事が失敗つづきの斎藤修一郎は、佐々友房、元田肇とともに三二年八月に帝国党を結成した。斎藤は運動資金として三井銀行からの一〇万円など巨額の借金をつくり、やがて首がまわらなくなる。すでに巨額の手切金をとって三菱を飛びだしてささやかな鉱山事業の経営者となった長谷川芳之助も、斎藤にさそわれて帝国党から立候補して衆議院議員となるが党勢は一向に振わない。山県の第二次内閣、桂太郎の第一次内閣を支持して奮闘したが、三八年一二月には甲辰倶楽部と合併して大同倶楽部となる。ついに帝国党は消滅し、斎藤の借金だけがふくらんだ。伊藤の第四次内閣が三四年五月に崩壊し、井上馨に大命降下したものの、渋沢栄一を蔵相に迎えることができず、組閣に失敗した。そうして桂太郎の

第2表　最初の博士たち

〈工学博士〉

松本　荘一郎	A 3～9		工部省
原口　要	開成中退，A 8～13		工部省
古市　公威	開成中退，F 8～13	○	工科学長
長谷川芳之助	開成中退，A 8～13		三菱
志田　林三郎	工部12，E12～16	○	工科教頭
高松　豊吉	理学11，E13～15	○	工科教授
谷口　直貞	開成中退，E 9～14	○	工科教授
平井　晴二郎	開成中退，A 8～13		北海道
辰野　金吾	工部12，E12～16	○	工科教授
巌谷　立太郎	開成中退，D10～14	○	工科教授
山田　要吉	A 3～8	○	工科教授
増田　礼作	開成中退，E 9～14		工部省
石橋　絢彦	工部12，E12～16		工部省
片山　東熊	工部12		宮内省
沖野　忠雄	開成中退，F 8～13		内務省
南　清	工部11，E12～16		工部省
石黒　五十二	理学11，E12～16		内務省
南部　球吾	開成中退，A 9～14		三菱
高山　甚太郎	理学11，D22～24		農商務省
清水　済	理学12，欧21～24	・	工科教授
藤岡　市助	工部14		東京電灯
仙石　貫	理学11		逓信省
三好　晋六郎	工部12，E12～16	○	工科教授
渡辺　渡	理学12，D15～18	○	工科教授
白石　直治	理学14，D16～20	・	工科教授
中沢　岩太	理学12，D16～20	・	工科教授
山口　半六	開成中退，F 9～14		文部省
野呂　景義	理学15，D18～22	・	工科教授
大島　道太郎	理学中退，D10～15		御料局
田辺　朔郎	工部16	・	工科教授
真野　文二	工部14，E19～22	・	工科教授

〈法学博士〉

箕作　麟祥	F慶応2～1		仏法校長
田尻　稲次郎	A 2～12	○	法科教授
菊池　武夫	開成中退，A 8～13	○	司法省
穂積　陳重	開成中退，ED 9～14	○	法科教頭
鳩山　和夫	開成中退，A 8～13	○	法科教授
井上　正一	司法 9，F 9～13		司法省
木下　広次	司法 9，F 9～13	○	法科教授
熊野　敬三	司法 9，F 9～13		司法省
岡村　俊彦	開成中退，E 9～14		司法省
富井　政章	F10～16	○	法科教授
末岡　精一	文学14，D15～19	○	法科教授
宮崎　道三郎	法学13，D17～21	・	法科教授
増島　六一郎	法学12，E12～17		英法校長
土方　寧	法学15，E20～22	・	法科教授
穂積　八束	法学16，D17～22	・	法科教授
梅　謙次郎	司法17，F18～23	・	法科教授
和田垣　謙三	文学13，ED14～17	・	法科教授
金井　延	法学18，DE19～23	・	法科教授

開成：東京開成学校
理学：東京大学理学部
工学：工部大学校
司法：司法省法学校
法学：東京大学法学部
文学：東京大学文学部
工科：工科大学
法科：法科大学
仏法校長：和仏法律学校長
英法校長：英和法律学校長

A：アメリカ
E：イギリス
F：フランス
D：ドイツ
欧：ヨーロッパ

新しい学位制度ができて最初に学位を授けられたのは，第1次（明治21年5月7日），第2次（21年6月7日），第3次（24年8月24日）に選定された人たちで，第1次，第2次は各5名づつ，第3次は工学21名，法学8名，理学16名，文学4名，医学20名であった。紙面の都合で理学，文学，医学は割愛した。どんな学校を卒業，中途退学して，どこへ何年間留学したか，帰国してどんな職席を与えられたか，15～19年ころについて略記した。

古市公威は19年から31年にかけて工科大学長を勤め，工学の大御所となる。帝国大学の発展に大きい期待を寄せた伊藤博文は，鳩山和夫を法科大学長にしたがったが実現せず，26年に学長になった穂積陳重がやがて法学の大御所になる。大学創成に当った教授の第一陣に○を，第二陣に・を付した。古市の後を継ぐものと思われた志田林三郎は25年に病没，辰野金吾，渡辺渡が次々に学長となった。初期は圧倒的に士族が多いが，志田，高松，清水，渡辺，中沢，金井は平民である。

野心がかなって首相となるが、これまで井上に引きたてられてきた斎藤の運命も、このときにつきていたと言えよう。

桂の第一次内閣に求められて、三六年三月に古市は再び逓信省に入って鉄道作業局長官となるが、京釜鉄道建設の前線に赴くための便法であった。三六年一二月に休職となり、二年後に休職が満期となるまでに、京釜鉄道を完成することが厳しく約束されたのであった。古市は休職と同時に国策会社の京釜鉄道株式会社の総裁となり、時こそ来たれと振るいたった。鉄道建設のチームを編成して送りだしたが、古市が技師長に選んだのは、東京大学理学部土木工学科を一六年に卒業した大屋権平（長州藩）であった。三七年には日露戦争が始まり、古市は現地で陣頭指揮して、一一月に全線開通にこぎつけ、三八年一月には京釜鉄道は営業を開始した。東郷平八郎の連合艦隊が日本海海戦に勝った日に、くしくも京釜鉄道の完成祝賀会がぶつかり、古市は胸をなでおろすことができた。もはやこれで、抜擢された山県に対する負い目は、十分に果たされたのであった。みっちり腕を磨いて貫禄をつけた大屋に後をまかせて、久しぶりに静かな生活に帰ろうと決心した。

ところが一二月に韓国統監になってやって来た伊藤博文が、辞を低くして古市を説きふせた。三九年六月に止むなく統監府鉄道管理局長官となり、翌年六月まで厄介な残務処理にいそしまねばならなくなった。

なお古市は児玉源太郎から南満州鉄道株式会社の総裁にならぬかと言われ、機略縦横の後藤新平を適任であるとして辞退している（後々までも古市は、後藤のまねはできない、判断を誤らなかったと述懐している）。児玉だけでなく、当時の山県も伊藤も古市の才腕を高く評価していた。伊藤が四二年一〇月に暗殺されたとき、古市はロンドンでやがて開催される日英博覧会や、副理事に推挙された日仏協会のことで、無邪気な夢をふくらましていた。こういう古市の姿を見ていた西園寺公望は、古市男爵記念事業会が伝記『古市公威』を刊行したとき、古市を偲んで「才学識」と書いて巻頭を飾ることにした。パリに留学した西園寺は一〇年ぶりの、古市は五年ぶりの明治一三年に、ともに祖国の土を踏んだ間柄であった。

伊藤の死に続いて、四三年八月に日韓併合が強行された。その日の夜に、最初の朝鮮総督に就任する寺内正毅は側近と小宴を催し〝太閤も加藤、小西も生きてあれば、今宵の月を何と見るらむ〟という和歌をものしたと伝えられている。石本新六のように軍人を志望する気になれなかった古市は、山県の側近のなかでも石黒忠悳の心境に共感をおぼえていた。石黒は朝鮮人の心を思うと、お祭り騒ぎはできないと思いたち、憂国の心を鎮めようとして、神宮、御陵めぐりの旅に出た。古市は石黒のまねはしなかったけれど普仏戦争に負けたフランスに留学したことはよかった、勝ったドイツで勉強しなくてよかったと考えるのであった。かつて小坂も陸軍大学校の秀才が成たけだかになるのを悲しみ、功名心にかられて平常心を失なうことを自戒していた。仏学に傾倒して、好き友と交わったのは幸せであった。古市の帰国を待たずに亡くなった父や祖父の生涯に比べて、なんと恵まれたことであるか。不惜身命の国士であった小村寿太郎のように偉くはない人間として、これからはどのように生きてゆくか、古市の回顧は果てしなかった。

三八年の写真をみつめながら、更に筆を進めたい。古市はすでに京釜鉄道の速成を完了して、心に余裕をもつことができた。原口要は国内鉄道の建設で功なり名をとげ、これからは清国政府の鉄道顧問として活動することになる。平井晴二郎は松本荘一郎、原口要の後を継いで鉄道作業局長官となっており、まもなく鉄道庁総裁となり、更に大正一五年からは中華民国政府の鉄道事業を応援する。

小村は黙々と命の限り、すでに敷かれた外交路線を走らねばならない。弁護士として令名の高い鳩山と菊池は、これまで通り信ずる途を歩みつづける。菊池は二三年になった東京法学院（中央大学）の院長を死ぬまでつづけることになるが、鳩山は二三年から東京専門学校（早稲田大学）の校長を勤め、二五年から衆議院選挙に連続当選し、大隈重信の憲政本党で動いていた。ところが四〇年に校長を止めさせられ、四一年に脱党して自由党に入り、ついに大隈重信一派とは犬猿の関係になる。旧友は早くから鳩山が藩閥と戦っても勝つ見込みはないと危ぶんでいた。留学から帰国して長谷川につづいて三菱に入った南部は、鉱山事業の長老として静かに収まっている。長谷川、南部とともにコロンビア大学に学んだ松井は、二三年からおだやかに農科大学長をつづけているが、法科大学の戸水寛人教授が政府の軟弱外交を弾劾する論文を三八年八月に発表したのを切っかけに、東京帝国大学から京都帝国大学に波及する大騒動がおころうとは、第一回留学生の誰もが想像できなかったであろう。騒動の渦中に松井は巻きこまれて、一二月二日に大学総長を兼任させられ、たちまち一二月一四日に総長を解任された（総長の山川健次郎が退陣させられ、代わって浜尾新が再び登場するまでの泡沫のような総長にすぎなかったのである）。それでも農科大学長は四四年二月に死ぬまで勤めることになる。もっとも悲惨なのは外務省、農商務省で飛ぶ鳥も落とす勢いを示した斎藤で、貧鬼に追われる窮状におちいってしまった。『溯源』には四二年一二月四日に、杉浦重剛の称好塾の会合に出席して述べた言葉が記録されている。そうして斎藤は四三年五月六日に病没する。『溯源』は五月一五日に刊行されたから、待ちわびていた『溯源』を斎藤は手にとることができなかった。斎藤につづいて、松井、鳩山、小村、菊池、長谷川がばたばたと倒れていった。『溯源』に載った二枚の写真を並べて、しばしば往年を回顧することができたのは、古市、原口、平井、南部の四名にすぎなかった。